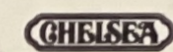
BEE GEES

Love Sounds 31

A KYODO TOKYO PRESENTATION '73

公演スケジュール

9月1日(土)7:00P.M.東京
新宿・厚生年金ホール　主催ー東京12チャンネル
9月2日(日)6:30P.M.東京
渋谷公会堂(東京民音)
9月5日(水)6:30P.M.福岡
九電記念体育館　主催ー九州朝日放送
9月6日(木)6:30P.M.倉敷
倉敷市民会館　主催ー山陽放送
9月7日(金)6:30P.M.名古屋
名古屋市民会館　主催ー中部日本放送
9月8日(土)7:00P.M.東京
渋谷公会堂　主催ー東京12チャンネル
9月10日(月)7:00P.M.大阪
フェスティバルホール(関西民音)
9月11日(火)7:00P.M.大阪
フェスティバルホール　主催ーFM大阪
9月12日(水)7:00P.M.京都
京都会館(関西民音)
9月13日(木)6:30P.M.静岡
駿府会館　主催ーテレビ静岡
9月14日(金)7:00P.M.東京
新宿・厚生年金ホール　主催ー東京12チャンネル
9月15日(土)2:00P.M.東京
新宿・厚生年金ホール　主催ー東京12チャンネル

BEE GEES

来日メンバー　Glyn Hale：Conducter　Alan Kendall：Guitarist　Dennis Bryon：Drummer　第1部　Special Guest Star：Jimmy Stevens

東京12チャンネル　ビー・ジーズ独占放映　ラブ・サウンズ・スペシャル　9月26日(水)　10:30P.M.～11:25P.M.　提供＝麒麟麦酒・明治製菓・松下電器

イギリスのポップス界とビー・ジーズ

ロックは、まぎれもなく、アメリカの産んだ一文化である。ロックの歴史を逆上るまでもなく、ロカビリー、ロックンロールと呼ばれてきた過去から、現在は単にロックと呼ぶようになったが、もっと広い意味でポピュラー・ミュージックと呼ばれているこの音楽こそ、アメリカの伝統が息づいているブルース、カントリー・ミュージック、民謡のエキスが抽出され、リズムという味つけをされて作り出されたものに他ならない。エルヴィス・プレスリーの出現で、ロックはアメリカにひたと根を生やし、その牙城はゆるぎないものとなった。イギリスのクリフ・リチャード、イタリアのアドリアーノ・チェレンターノ、フランスのジョニー・アリディー、日本の平尾昌章など、プレスリーに刺激されて登場してきたにちがいない。そして誰もがプレスリーのレパートリーをとりあげ、物真似することから始まり、全世界にロックは拡がって行ったのである。

しかし1962年からロック＝アメリカという観念がぐらつきはじめた。イギリスにビートルズが現われ、その主導権を否応なしにイギリスに奪われてしまったからだ。アメリカのロック界は枯れはじめ次第にビートルズ化したグループに埋められ、面目をつぶされて行くことになる。しかしそれでも、産みの親アメリカは、ビートルズをはじめとする一連のイギリス勢に“ブリティッシュ・ロック”という呼び方をつけ、本場ものとはちがうんだとがんばっていたものだ。

だがビートルズ・パワーの余勢をかったイギリスは、ニュー・ロックの牙城を築き、アメリカに主導権を返えそうとはしなかった。

もっと具体的にいうならば、ビートルズの遺したものを想い出してみるのが手っとり早い。ビートルズは、それまでの歌手とバック・グループという枠をとりはずした。皆が歌って楽器をプレーするのである。自分達で曲を作り、自分達で演ることを教えてくれた。そして彼等は極めてカジュアルな服装でステージに上ってきた。この風潮はまたたく間に全世界のミュージシャンに伝染した。そしてニュー・ロックは、もうひとつ進んで、それまでは歌のバック・アップにすぎなかった楽器を主役におしたてた。ギタリスト、ベーシスト、ドラマーがスターになった。彼らは楽器で主張し、音楽の中に本物の自由を求めた。マネージャー不在プロデューサー不在、1曲がレコード片面全部を占領しようともかまわないという“規則”を無視することで、音楽、特にロックの在り方を変えて行った。こうした出来事もイギリスが火付役となったのである。しかしここで冷静に考えるなら、ニュー・ロックのミュージシャンが目指した方向は、何も彼等のアイディアではないことに気づくであろう。インプロビゼーションならアメリカのジャズ・メンがとっくにやっていたことだし、楽器が主役になったことだって、クラシックやジャズでは、当り前のことである。ただ、アメリカのミュージシャンより、イギリスのミュージシャンの方が、そうしたものに気づくのに敏感であったということだ。この敏感さが、イギリスのロック・ミュージシャン或いはレコード・プロデューサー、A&Rマンといった音楽をとりまく連中には確かにあるような気がする。

こうしてアメリカン・ロックと一線を画してきたブリティッシュ・ロックだが現状はどうであろう。一時ほど、アメリカだのイギリスだのとはっきり分けられるほど、ブリティッシュ勢に精彩がないように見える。どこかで同化してしまったものが、新しい方向がみつからないまま右往左往しはじめたために低迷しているのか分からない。ただロックが楽音としての範ちゅうにのみとどまらず、もっと視覚的、いいかえれば、音に色づけしてきたような現象が起こってきた。これがグラム・ロックと呼ばれるものである。T・レックス、デヴィッド・ボウイといった連中は、音楽をメディアにして、もっと違ったものを出そうと試みていた。メイキャップや服装で度肝をぬくことで音に色彩を与えようとしていた。そのために彼等は、しばしばミュージシャンではなく、ショウ・マンと呼ばれた由縁であろう。演奏技術の巧拙より、何着衣裳を替えたかの方が先行してしまった。しかしこうした風潮は、イギリスでは伝統的なもので、かつては、クレイジー・アーサー・ブラウン、ミック・ジャガーあたりがすでに試みていたことである。もはや現象ではなく、ロックの中では伝統的にさえなってきたのか、この種のグループは後を断たない。イギリスでは、スレイド、ロキシー・ミュージック、シルバーヘッド、アメリカでは、アリス・クーパー、イギー&ストゥージスといった新しいグラム・ロッカーが続々と待機中である。

一方、こうした華やかなロック・グループとは対照的に、ロック・ミュージックそのものを深く追求してきた一派もちゃんといた。ロック・バンドはギター、ベース、ドラムといったリズム楽器からはじき出されるパワフルなビートこそ身上とされていたものだが、ギターがリードをとり、即興演奏を繰りひろげて行くようになってから、楽器の特性を活かしたものへと移行して行くのみならず、それまで考えつかなかったような新種楽器も登場して、サウンドに深みを持たせる工夫がなされてきた。ムーグ・シンセサイザーなどはその最たるものであろう。これは機械に楽器の音を覚えさせ、演奏する時にその音を操作することによってギターともキーボードともつかない、独特のサウンドを出す効果をあげている。エマーソン、レイク&パーマー、イエス、ピンク・フロイド、キング・クリムゾンといったグループは、フルにこうした新種楽器の工夫研究に余念がないようだ。彼等は派手なステージ・アクションや衣裳よりも、まずはサウンドを第1に考え時にはプログレッシヴな音作りに励んでいるのである。これはまったくイギリスのミュージシャンに特有のことであり、むしろアメリカ側が真似ているぐらいである。だから、いわゆるニュー・ロックはイギリスにおいてのみ、現在に継承され、未来に伝えられて行くように見えるのだ。蛇足ながら、アメリカは現在、プログレッシヴな方向をさけて、むしろダウン・トゥ・アースに目覚めたのか、カントリーやフォークをとり入れた素朴な音楽に逆もどりしつつあるようだ。

以上挙げてきた大きなふたつの流れ—グラム・ロックとプログレッシヴ・ロックの他に、現在のイギリスの音楽情況をみるとすれば、ローリング・ストーンズを頂点とするハード・ロック・グループの流れであろうか。中でも、ザ・フーのサウンドそのものはストーンズに近いが、彼等はつねに意欲的に活動している。その顕著なものが、ロック・オペラ「トミー」の作成であり、トータル・アルバムの意義を知らしめたということであろう。フェイセズ、ハンブル・パイなども、ストーンズの枠からはあまり出ていない。

ビートルズの出現後、続々と登場した一連のリバプール・サウンドのグループの殆んどは、その名もきかれなくなってしまった。つい最近ニューヨークで、ハーマンズ・ハーミッツ、ゲリー&ペイスメーカーズ、サーチャーズといったグループの懐メロ・コンサートが行われたそうだが、リバイバルは無理だろう。こうしたヒット・ソング、特にシングル・レコードのヒットに寄与したグループの伝統は、今やまったく受け継がれていないのだろうか？　勿論昨日今日名乗りをあげたグループはたくさんいるにちがいない。しかしビッグ・ヒットのきざしはないまま、次から次へと時は移り変って行くようだ。

そんな中で、デビュー以来8年間の長きにわたって、人気を誇っているのがビー・ジーズである。彼等が今日もなおイギリス、日本で人気がある最大の理由は何であろう。ひとつには、メロディーのさわやかさ——ギブ兄弟のメロディーに対するセンスの良さと才能であろうことはまぎれもない。もうひとつは、彼等のデビュー以来のマネージャーであるロバート・スティグウッドの力であろう。スティグウッドは、かつてブライアン・エプスタインとともにビートルズ売り出しに力を入れた人であり、後にロバート・スティグウッド・オーガニゼーションを創立して、エプスタインとたもとを訣けた。一説にはエプスタインと折り合いが悪くけんか別れした挙句、ビー・ジーズをオーストラリアから連れてきて、ビートルズに対抗させるため売り出したというが、真偽のほどは分らない。いずれにもせよ、スティグウッドという人は恐るべきプロデューサーである。この人の才能、特に商才はズバ抜けたものがあり、私も幾度か会ったが、学ぶところ大であった。グループをがっちりとしょう握出来るマネージャー、そしてグループの個々をも大切に扱えるマネージャーはそう多くはない。マネージャーとミュージシャンのけんか別れ話など、はいて捨てるほどあるのを見ても分かる通りだ。スティグウッドとビー・ジーズの絆の固さもまた、このグループの今日ある大きな要因であろう。勿論ビー・ジーズも何度かの危機をくぐりぬけてきている。しかしバリー、モーリス、ロビン兄弟の結束の固さと、兄弟ならではの友愛が、バラバラになりかけたビー・ジーズを元に戻したのである。

彼等のグループとしての魅力のもう一面は、あのソフトなヴォーカルであろう。バリーとロビンの声は酷似しているが、2人ともヴァイブレーションのきいたユニークな唱法を持っている。この歌い方がたまらなくナイーヴで、きく者の心に浸み通るような気がするのである。

私はモーリス・ギブとは気が合って、イギリスへ行くと彼を訪ねるのだが、いつも歓たいしてくれる。3人とも、とっても気のいい連中で、さわやかな後味を残してくれる。

私が最初に彼等と会ったのは、1965年のことで、“マサチューセッツ”の発売前のことだった。ロバート・スティグウッドがこの曲の率直な感想をきかせて欲しいという。私は1度きいただけですっかりノック・アウトされた。何ていい曲だろうと心底思った。それ以上の言葉がみつからないのが歯がゆかった。スティグウッドはすぐにビー・ジーズのメンバーを集めて、私どもは彼のアパートへ連れて行かれた。この曲を、世界中でヒットさせるためには何でも協力するからいってくれというのだ。半ば強制的にインタビューさせられ、ついでに、当時私が出ていたテレビとラジオの番組に国際電話で彼等の声を送ったりもした。オーガニゼーションは全社員あげてビー・ジーズ売り出しにとり組んでいた。キャンペーンの内容もすさまじかった。映画部の部長スキナー氏は、ソニーのビデオコーダーで、ハンブルグではいかにすさまじい人気ぶりであったかを収めたビー・ジーズのハンブルグ・コンサートを観せてくれた。これをプロモーション・フィルムに使用したいと思うのだがどうだろうというのである。世界主要都市にビー・ジーズ・ファン・クラブを設置し、ビー・ジーズ情報源の根拠地にしようという話しや、その他思い出せないほどのアイディアを話されたり求められたりで、私もビー・ジーズ要員の1人にされてしまったようだった。

この大々的なビー・ジーズ売り出し作戦に対して、メンバーは従順に従っていた。スティグウッドを100％信頼しているから、ビジネスのことは一切彼に委せているんだとバリーは話していた。ただし一歩レコーディング・スタジオに入るや、主導権は彼等が握っていた。スティグウッドは一言も余計な口ははさまない。この統制こそ、ショウ・ビジネスに働く人間には必要だと思うのだが、昨今は、全部自分達でやるのをよしとする風潮が強いようだ。音楽家がソロバンをはじいていたら本来の仕事がおざなりになると思うのだが、どうも1ドルでも余分に人にとられるのがいやらしい。

私などは、“ラブ・サムバディ”“マサチューセッツ”といったビー・ジーズ初期の曲が好きであるが、むしろ日本では“メロディ・フェアー”の映画と主題曲でビー・ジーズの株がグンと上ったようである。ビートルズと同様に、ビー・ジーズの音もいつの時代にも受け入れられる要素がありそうだ。そのやさしさと甘さは、才人の求めるものと合致しているし、特に個性的でないところも、流行と関りなくていい。エバーグリーンな貴重なグループのひとつである。

《「ミュージック・ライフ」編集長
星加ルミ子》

座談会：ビー・ジーズの魅力を語る

平均的な強味をもつビー・ジーズ

――ビー・ジーズのファンというのは、幅が非常に広いでしょう。ある年令だけとは限らなくて、うんと若い人から、うんと年配の人までビー・ジーズのファンがいるわけですね。こういうのは、外来音楽としては、日本においてはまれなんですね。ビートルズが全盛のときでさえも、ある年代の人だけにしかアピールされていなかったけれども、いまのビー・ジーズというのは、浸透してるでしょう。

平川：浸透してるといえば、してるだろう。要するに、それだけむずかしくないからじゃない？

平田：そうですね。だれにでもわかる。

平川：あのグループは、理屈こねなくてすむでしょう。それに、アメリカ風なのか、イギリス風なのかということも、わからないみたいな……。

――この人たちは、もともとはオーストラリア人なわけですね。オーストラリア出身ですね。オーストラリア人というのは、非常におもしろいですよ、なにか、世界の感覚を持ってる。イギリスだけのものでもないし、アメリカだけのものでもないし、少しずつ、インターナショナルな感覚を持ってる人たちが多いと思うんですけどね。

平田：オーストラリアで生まれたんでしたっけ？

――でしょう？

平田：イギリスで生まれて、オーストラリアへ渡ったと、ちょっと聞いたんですけど。

岡田：イギリスで生まれて、家族と渡って、それでまた戻ってきた。

平川：どっちかというと、育ちはオーストラリアでしょう。

――実際、日本でもビー・ジーズというのは、レコード会社に聞くと、レコードが売れてるそうですし、出すレコードが平均して売れてる。ものすごく売れてないものもなければ、出るとすぐ、飛ぶように売れたというのもないかわりに。

平川：ビー・ジーズを出すと持ち直すという話もあるから(笑)

――こういっちゃ悪いけど、日本ではさほど宣伝してなかったでしょう。むしろ、ラジオ・メディアなんかをとおして、聞いてる人たちの間から、ビー・ジーズはじわじわと人気が出てきたというんでしょう。

平川：そもそもの人気の出方というのは、ぼくはいちばん責任を持たなければいけないのは、「ミュージック・ライフ」だと思うよ。だって「ニューヨーク炭鉱の悲劇」というのは、一番最初あまりヒットしなかったでしょう。だけど、あれをいい、いいと宣伝したのは「ミュージック・ライフ」だよ。

――すばらしいこと、いってくださる。ほかの原稿でも書きましたけど、私はイギリスで彼らに会って、強引に彼らのアパートまで連れていかれまして、レコードを聞かされたわけ。もう、すばらしい、これは日本はもちろん、世界的にヒット間違いないと。で1枚、デモ用のレコードをもらって帰ってきたんです。当時、私はTBSで深夜の、いまもやってる…

平川：「パック・イン・ミュージック」。あなた忘れちゃ困る、初代なんだから。

――帰ってきて、「パック・イン・ミュージック」にすぐかけたの。そうしたら、次の週にものすごいリクエストがきたんです。それで私、ビー・ジーズという名前を日本人でもある一部の音楽ファンは知ってたかもしれないけれども、やっぱり、直接のビー・ジーズ・ファンを獲得した曲というのは、あのときの「マサチューセッツ」だと思うの。

平田：そうですね。そのあと、続いてたくさんヒット曲が出たんですね。

ビー・ジーズ・サウンドの推移と魅力

――その後、解散したというか、メンバーがバラバラになって、兄弟以外の人が2人抜けちゃったりということで、一時、ちょっとスランプ状態がありましたね。それで、私いま思うんですけれども、たとえば「メロディー・フェア」が、映画とともにこの曲があたって、新しいビー・ジーズのファンが、そこでいっぱいついたと思うんです。昨年ですね。そうすると、私たちが前半、後半にビー・ジーズ・サウンドというものを分けたときに、平田さん、どっちが好きですか。

平田：自分がラジオのヒットパレードでたて続けに聞いた、初期のヒット曲がいいですね。

――すなわち前期、後期と分けられるくらい、ビー・ジーズ・サウンドに変化がありますか。

平田：私はそれほど前期、後期というふうには感じませんね。ただ、話がちょっと飛びますけど、この間出たので、ちょっとタイトルを忘れたんですけど、音がすごく幅のあるつくり方になってきた気がします。

――具体的にいうと？

平田：以前からストリングスとか、そういうオーケストレーションを使ってたけど、そういうものの使い方が、より洗練されたというのかな。ビー・ジーズというのは、すごいロマンチシズムがあるんだけれども、どこか泥臭い感じがあるわけ。カーペンターズみたいに、ロマンチシズムが完璧に洗練されてないんですね。どこか泥臭いロマンチシズムがあって、それが、悪いことばでいえば、ミーハーもおとなの人までにウケると思うんですけれども、それが、今度のではすごく洗練されてる。

――いま、前半、後半と分けられるほど大きな差はないとおっしゃったんだけれども、たとえば、「メロディー・フェア」以降、ビー・ジーズ・ファンになった人たちに、「マサチューセッツ」や、「ラブ・サムバディー」を聞かせても、その人たちはやっぱり、いいというかしら。

岡田：「メロディー・フェア」とかは、初期のアルバムに入ってたやつで、これは、ぼくの感じなんですけれども、ビー・ジーズの場合は、「傷心の日日」という大ヒットがありましたけど、あの辺から、音づくりというのはすごいスケールの大きい……。それほど微妙な差はないと思うんです。ただ、オーケストラのアレンジとか、それがダイナミックになって、幅広いサウンドできたと思うんです。ただ、ビー・ジーズがいいと思ってることは、すごい哀愁をただよわせながら、叙情があるというのかな、そういうスタンドが、まさに日本人にピッタリなんじゃないかなと思うんです。「マサチューセッツ」にしても「ホリディー」にしても、それを知らない人たちが、いま聞いてもけっこう好きになるんじゃないかと思いますけどね。

――こんなに移りかわりの激しいいまの音楽界で、アメリカ、イギリス、日本を見ても、悪くいえば、ほとんど変化のないサウンドを、ずうっと持続してきてるビー・ジーズが、何代にもわたって、たとえば自分のお兄さんか、お姉さんが好きで、それを妹、弟が聞いて、いま好きになってると思うんです。その根本に流れてるビー・ジーズのメロディーの魅力というのは、いったい何でしょうか。

平川：いちばん感じるのは、聞いてる人に歌える部分が、必ずあるということ。ぼくは、ビー・ジーズのコンサートを見てないんだけれども、たぶん、こうなるだろうという感じがするのは、「マサチューセッツ」にしても、何にしても、「さぁ一緒に歌いましょう」といわれて大声で歌う、あの類いじゃなくて、彼らが歌ってるステージを見ながら、何となく頭の中でハミングしちゃうみたいな、そういう曲ばっかりでしょう。もっと別ないい方をすれば、スタンダードとして固定化されて残るような、はっきりしたメロディーを持ってる。その辺に、すごい魅力をぼくは感じるんだけどね。

ビー・ジーズの清潔感について

――もうひとつは、ビー・ジーズというのが音をとおしてですけれども、いわゆる清潔な感じがするんじゃないですか。

平川：するね。

――あの清潔感って、日本人はとくに好きでしょう。レターメンなんかアメリカでは忘れられてるのに、いまだに、日本じゃレターメンというと、ワァーッとくる。そういう感じね。

平川：アンディ・ウイリアムスとかね。いま、ちょっと思い出したけれども、ルルと別れたって話があるけど……。

平田：別れたんでしょう。

――ほんと？　もう別れちゃったの？ちょっとデメリットですね。

平川：この前日本にきたときは、ルルが舞台袖のところで、一生懸命になって見てたというんで、それでもウケてたでしょう。

――でも、ビー・ジーズ・ファンにしてみたら、ルルが悪いから別れてやったと、こういう感じじゃないかしら(笑)。どうしても、ビー・ジーズは清潔で、悪ものにはならないわけ。バリー・ギブは結婚しなくて、同棲してるんでしょう。いまだに結婚式あげてない。ま、それはどうでもいいですけど(笑)。でも何というか、「メロディー・フェア」の映画自体も、ビー・ジーズの清潔感を盛り立てるには、ものすごくいい材料になってるでしょう。

平川：そうだろうね。

――昨年も、私びっくりしたんだけど、親子連れでコンサートにきてる人がたくさんいたわね。それも、なぜか、おかあさんときてる。おとうさんはきてないのよ。あれ、どうしてでしょう。

平川：どっちかいうと、やっぱり女性向きなのかもしれないよ。

平田：だから、くすぐるようなロマンチシズムなんでしょうね。いやらしいロマンチシズムじゃなくて、さわやかな。それで、若い女の子たち、たとえば、中学生なんかでも、よく地方の人からときどき手紙を個人的にもらったりすると、たとえば、ビー・ジーズとか、シルビー・バルタンとか、好きな人を見に行きたいのに、行くのを許してくれないんですって。で、おかあさんが一緒に行くなら見せてくれる。レコードなんか聞かせたり、写真なんかも見せて、これならうちの娘もいいだろうと、一緒に2枚券を買って見に行くという話を、2、3回聞きましたけどね。

平川：そういうのには、絶対、最適ね。

――文部省推薦ね(笑)。

平川：文部省推薦はオーバーだけど、確かにベタつかないのね。それでいて、表面だけで通り過ぎないところがあるでしょう。

――バリー・ギブにしてもロビンの声にしても、強烈ではないけれども、バイブレーションきかせて、非常に個性的な歌い方ですね。

平川：あれは、よく聞くとセクシーなんだよね。

平田：そうなんですね。いやらしいんですね。

――そう？

平川：あなた女じゃないね、感じないなんてのは(笑)。

――だって、男の人が感じるセクシーさていうのは……

平川：ぼくら、声を商売にしてるから、ぼくが感じなくても、あれはセクシーなはずだってだいたいわかるわけ。

平田：ロビン・ギブってセクシーですよ。変なふうに、小節きかせるというか、バイブレーション……

――あの歌い方は、なかなかまねできないですね。あれはビー・ジーズ・サウンドの著しい特色ですね。

平田：前回の武道館のとき、私は実際にコンサートは見ないで、あとで12チャンネルで見たんですけど、マイクのあれで手を押えて、バックの演奏を一生懸命聞き取ろうとして、そっちに気をとられて、音程がくるってるのか、持ち味のバイブレーションなのか、ちょっとわからないところがあったりしました。

――鶴田浩二ふうに、耳を押えながら……。

平川：あれはいわゆる、おかあちゃん連中には、ルミちゃんより年上の方々には、セクシーだとか何とも感じなくて、ただ清潔に見えるから、これはいいだろうということになる。中学生、高校生の女の子には非常にセクシーなんだ。

――中学生のころの感覚、忘れた。古い昔の話ですもの。それからもうひとつ、こういうよさはどうですか。たとえば、だんだんロックというものが全盛になってくるに従って、いわゆる、ロック・ミュージシャンというのは、あまりステージ衣裳に対してかまわなくなっちゃったでしょう。いわゆるGパンはいて、Tシャツ着て、ステージに登って、そのままプレーして、終わったらニコニコッとして、たばこ吸いながら降りてきて、それがひとつのコミュニケーションみたいにいわれた時代があったけど、ビー・ジーズの場合には、いかにもスター然としてるでしょう。やっぱり、ステージの上の人だという、若い人たちの夢とか、あこがれを、ビー・ジーズに反映させるというのはないですか。

平川：それはむしろ、あこがれというより、格調の高さみたいな感じにつながるんじゃない？　さっきいった清潔感みたいなものと同じで。

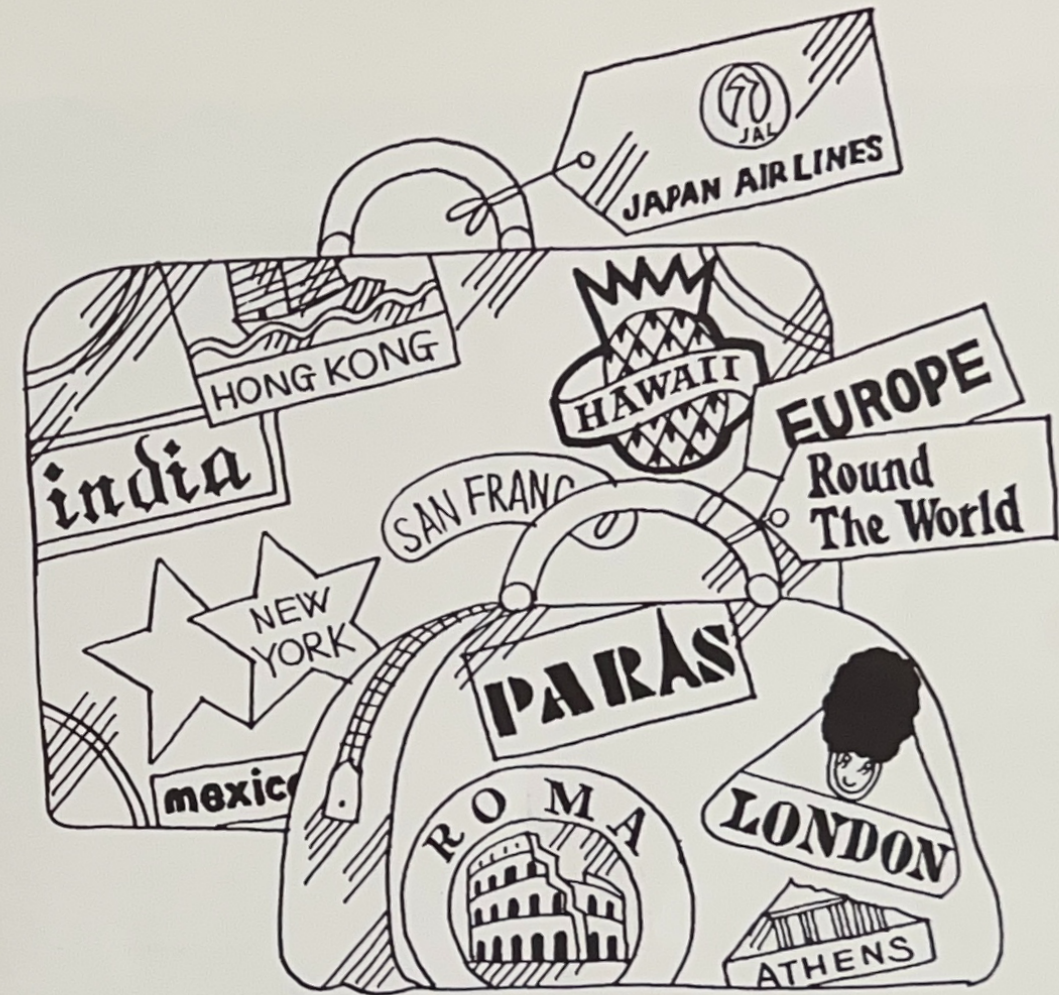
岡田：確かに、コンサートのときにいちばん感じたことは、何となく洋服着てても、バチッときまってる。イギリスの古い気品というか、ムードがピッタリというか、それで伸びのあるフィーリングで歌ってサマになる。見るからにビー・ジーズ・サウンドというのがあるんじゃないかな。

平川：あれは、自分たちの音楽を意識した上の服装だよね。

――ビー・ジーズは、ものすごくビジネスマンというか、商売にたけてるというか……

平川：それはそうでしょう。あなたがつかまったという敏腕のマネージャー氏も……。

ビー・ジーズのスタッフの偉さ

平田：やっぱり、兄弟以外の人を抜かして3人になったほうが、よかったんでしょうかね。いろいろ、お金の問題とかあ

星加ルミ子

岡田三郎

平川清圀

平田良子

出席者〈アイウエオ順〉

岡田三郎
フリー・ディレクター

平川清圀
TBSラジオ・ディレクター

平田良子
音楽評論家

司会＝星加ルミ子
「ミュージック・ライフ」編集長

るんでしょうけどね。
——それはそうでしょうね。けんかしたって、兄弟、親子だと思えば……。それ以上のけんかになっちゃえば別でしょうけど。平川ちゃんは、昨年、ビー・ジーズがきたときインタビューした？
平川：しなかった。
——全然会わなかった？会いました？
岡田：記者会見に行った。
平田：私も行った。
岡田：確かにビー・ジーズ以上に、まわりにいるスタッフのほうが有能だと思ったね。それは、すぐ感じましたよ。記者会見するにしても、スタッフがすごい気をつかってた。
——ものすごく大切にされてるグループですね。だから、話しててもガメツさがないの。おっとりして、自分たちは音楽のことだけを考えてればいいっていうふうに、まわりが、ちゃんとしてくれるるみたい。だから余計なこと一切考えなくて、ビー・ジーズは演奏する、歌うグループ。そしてほかのことは、まわりの連中がみんなやるというふうな、ひとつの行為の権限を、きちんと守ってる、実にいいブレーンがそろってると思うんです。
平川：プレスリーに似てるじゃない。
平田：やっぱり、ショー・ビジネスのスターでしょう。
——演奏してる連中が、お金のこと考えながら、頭でそろばんはじきながら演奏してると、いいものはできないんじゃないかな。そういうことはそういうことで、きちんとやってくれるしっかりした人がいて……。
平川：前回見てきた、ぼくのまわりの人の感想は、やっぱり、イギリスを地盤にしてる人たちだけあって、ショーという面では、いわゆるショーではなくて、コンサートだなという感想を持って帰ってきたな。あれでショーができるとはちょっと思えないし、やったとしても、たぶんドタバタぐらいで終わっちゃうんじゃないか。
平田：そういう意味ですね。音楽をじっくり聞かせるという感じですね。
——さっき、バイブレーションをきかしたヴォーカルは、何気なく聞いてるとわからないけれども、個性的であるように、ビー・ジーズの人間性をとらえていうと……。"人間性"というとオーバーですけれども、どこにでもいそうていて、そのくせ、ああいう3人というのは、なかなかいないでしょう。兄弟であるなしは抜きにして、こういうひとつのチームワークというものも、あのグループの生き続けてる根底にある原因のひとつじゃないかと思いますけどね。
平川：それと、ああいうグループは、どうしたって流行を追いかけて、表面に出てないと心配でしょうがないという面があって、新しいもの、新しいものと、普通なら追いかけるじゃない。その辺を結局は、一般はこれが好きなはずなんだと押えてるところなんざ、このマネージャーは、やっぱりたいへんなものだと思うよ。
——また、それにそうだとうなづいてる、ビー・ジーズもたいへんなものですね。
平川：もちろんそうだけども、それをうなづかせるだけの何かがあるから、そうなんだろうね。
岡田：ビー・ジーズって、6年でしょう。それにしては、みんな若くて、ちょうどいま、23~4ぐらいでしょう。
平田：もう少しいってるんじゃないかな。26ぐらいじゃない？
岡田：デビューしたのが、かなり早かったでしょう。20才前後ぐらいだったでしょう。ミュージシャンとしてやりたいこともいっぱいあったと思うけど、そのわりには、全然ゆれないで、スパッときてますね。それがすごい。
平川：よっぽどいいスタッフをそろえてると思う。ルミちゃんは、そのマネージャー氏にしか会わなかったわけ？
——そのことは、ほかの原稿に書いちゃったから……。
平川：ぼくはおそらく、アメリカでも、表面に出てるものと違って、一般大衆にうけてるのはビー・ジーズみたいな、ああいう一見わかりやすい音楽だと思うよ。それは、イギリスへ行くとなおさらじゃないかと思うよ。その辺をつかまえてる人のほうが、ビー・ジーズそのものより、やっぱり偉いんでしょう。
——日本と、アメリカと、イギリスのほかでは、ビー・ジーズは、どの辺なのかしら。
平川：本国のオーストラリア(笑)。
——本国のオーストラリアは、いうに及ばずでしょうね、きっと。フランスなんかだって実際には、私は知らないけれども、ビー・ジーズ・サウンドなんて、意外にかかってるんじゃないですかね。万国の人間に共通するものを持ってるんでしょう。ビー・ジーズみたいな音というのは、どこの国の人でも、こういうサウンドが好きな連中というのは、必ずいるんじゃないかしら。
平川：いるでしょうね。

ビー・ジーズの今後について

——いまはともかく、過去6年間、ビー・ジーズというのは、ほんとうの意味で人気のある、幅広い人気を持つグループとして君臨してきたんだけれども、今後のビー・ジーズはどうですか。このまま彼らがいくとして、いわゆる新しいファンを獲得していくという意味で、将来性はどうですか。
平川：表に出てくるグループじゃないかもしれないけれども、このまま、年相応に音楽ができていったら、落ち着いたグループとして、ちょうど、いまのレターメンみたいなグループになり得るんじゃないかと思うけど。要するに、パーッとした商売を考えなければ……。
岡田：はでな人気は出ないけれども、もう安定した一線を保つんじゃないかな。
——ビー・ジーズの音楽というのは、いわゆるイージー・リスニングでもないでしょう。かといって、ロックのよさももちろんありますけれども……
平川：だけど、ぼくはイージー・リスニングだと思うな。
——カーペンターズも、イージー・リスニング？
平川：カーペンターズより、もっとイージー・リスニングだと思うね。カーペンターズの曲というのは、むずかしくて歌えないもの。
岡田：カーペンターズって、簡単なようで歌えないですね。ハミングするところぐらいしか歌えない。
平川：すごくむずかしいよ。
——それは、カレン・カーペンターと一緒に歌おうとするからよ(笑)。あの人はうまいですよ。
平川：どうして、あんなにうまくなっちゃった。昔はへただったのにな。
——ビー・ジーズだって同じよ。なかなか一緒に歌えないよ。歌える曲ではあるけど。
平川：だけど、「ホリディー」なんて、ちょっと頭の中で考えると、むずかしそうな感じするけど、歌ってみるとスッと歌えちゃうよ。
——あら、すごいわね(笑)。でも、そのわりには何とかコンテストなんてやっても、ビー・ジーズふうというのは出てこないじゃない？
平川：だって、コンテストでパーッと目立つような曲じゃないもん。
——じみ過ぎみたいね。
平川：コンテストで先生方に認められる曲じゃないよ。だけど、あれをバッチリやれたら、コンテストで優勝できるな。
——そうね、きれいなハーモニーつけて。日本人はちょっとハーモニー音痴だから、なかなかうまくいかない。ビー・ジーズに匹敵するようなのといったら、カーペンターズがいちばん近い存在だけれども、ほかにいますか。
平川：カーペンターズは、ずいぶん遠い存在だよね。
平田：ぜんぜん遠い。でも、日本にいると近い。
——日本にいると近いよ。
平川：そうかね。
平田：サウンド自体はぜんぜん違いますけど、存在がね。
——結局、いまはでに騒がれてるニュー・ロックというか、ハード・ロックにしてもそうだけど、ああいうものは、騒がれてるわりには、レコードの売り上げはずっと落ちるでしょう。
平川：そうよ。だってあれは、ほんとにマスコミだけだもん。「ミュージック・ライフ」だけだもの、騒いでるのは(笑)。
——でも、意外に「ミュージック・ライフ」が騒がないビー・ジーズとか、カーペンターズというのは、実際には売れてるわけね。
平川：そうよ。
——みんな、何で知るんでしょう。
平川：その辺に注目してくださいよ(笑)。

BEE GEES

ビー・ジーズ・クローズ・アップ
フェイス拝見

バリー・ギブ

過去から現代に至るまで多くの音楽家が世に送り出されて参りましたが、音楽という仕事だけではなく、あらゆる仕事にも一流から末端まであるのが人生であります。

一流には一流の悩みがあり、末端には末端の苦しみがあるものです。しかし人間は自分の好む道の第１歩から一流を目指して、向上し伸び上がろうと努力はするが、稔らずに消えてしまう人も数多くあるものです。

運、不運の人間性も重大であります。バリー・ギブ君の生年月日と人相、彼は稀に見る一流音響芸術家であります。東洋の人相学でいう音楽の美と神秘性を追求める人相であり、彼の眼は音楽の美と夢を運ぶ吉相です。

時には強く時には弱く人の心をひきつけることの出来る、音楽家独得な良相であるが、仕事に忠実すぎて時には兄弟愛も、周囲の人間関係までも犠牲にしやすい。これからはこの点に良く気をつけることです。これから２，３年すると彼が第２のビー・ジーズを養成するかもしれませんが、むしろその方が良いといえましょう。

ロビン・ギブ

ロビン君は幅の広い芸術家の相です。兄のバリー君と少し違いますが、彼の眉毛と目相です。これも音響芸術では第１級のクラスですが、目がバリー君よりやや弱いし、眉も下り眉ですが、これがイギリス人特有な相です。

兄弟のなかで一番明るくユーモアもあり、兄弟のトラブルも、周囲の対人関係もうまくまとめて行くのも彼でしょう。愛情も全身で受け止めて行く堅実型ですが、裏切りは許せない性格です。

現在の仕事が的を得た仕事です。1974年からの彼の音楽性が楽しみです。彼の相は、音調の聞きわけが発達した巧みな音楽家の相です。

西洋骨相学研究家のウェルス氏も、額の横に広くなるのが音調性発達の表象といっていますが、適切で，これは東洋の相学も同じです。額の横に発達した相は外人の特徴で、堅に高いのは東洋人の特徴です。従って外国人は、一般に音楽の趣味が発達しているのもよくわかると思います。

モーリス・ギブ

３人兄弟そろって、口はやや大きい方です。とくにモーリス君の口は優秀なる芸術家であり、社交性もあります。少し奥目ですが、これは芸術だけでなく宗教家としても、教祖として熱狂的な指示を受けることでしょう。

音楽芸術では最高のギターリストであり、これからは作曲面にも新らしい分野を開いていくことでしょう。芸術という仕事に関しては、最高の努力と実行力のある人相です。音響芸術で人々の心を慰め楽しませるのも、彼の得意とするところであり、彼のよき人間性かもしれませんが、名誉より人気を大切にするのも彼独得の神経からでしょう。

彼のひげは独得なひげです。一口にひげといってもあごひげ、口ひげにしても人相の１部でありますし、人間の運命に多少でも掛わりがあります。相法でいう口ひげは、富のことであります。あごひげは地位を表わしていますが、モーリス君は口ひげ、あごひげ両方が吉相です。

彼は財運もあり、地位の栄達もあるでしょう。そのひげに光沢があればなお吉相でしょう。ともあれ、３人３様です。誰かが１人別れてしまえば、彼等の音楽の魅力は半減してしまいます。では1974年をお楽しみに。

《人相研究家：浅井金龍子》

BEE GEES

ここ数年間、ヘア・スタイルの流行は忙がしく動き変っている。トップ・ファッションを追いかけるには、よほど眼を光らせていなければダメ。しいていえば、ソフトなリーゼント・スタイルがトップを走っているといえるようだ。

彼ら、ビー・ジーズのメンバーもトップ・ファッションとはいいにくいが、長髪族の仲間入りをして久しい。

どちらかというとイギリスより、アメリカの若者に多くみられる長髪スタイルのようだ。

クルー・カットの青年がいつのまにか長髪になったようなナチュラルで、清潔な感じが強く、「クリーン&ナイス」というコトバがピタッとあてはまりそうだ。

ギンギラのトップ・ファッションを追うわけでもなく、マイ・ペースといったところなのだろう。

ロンドン郊外にある緑に囲まれた赤レンガの家、カリフォルニアのフリー・ウェイ沿いのオレンジ畑などを連想させる、さわやかなヘア・スタイルなのだ。

《ヘア・デザイナー：朝田孝一》

ヘア・スタイル拝見

BEE GEES

来日するアーティストたちの服装には楽しいものが多い。

土の臭いだらけのジーンズ・ファッション、グラムと呼ばれた都会派ギンギラ・ピカピカ・ファッション、インド人もドギッとするようなインド・ファッション……と連ねたらきりがない。

ビー・ジーズのファッションにはそうした派手さはない。彼らはイギリスのキャンパスでよく見かける、どことなくトラディショナルな香りのするカジュアル・ファッションが好みのようだ。

例えば、ピンクのなんのへんてつもないシャツをノータイで着て、黒のベッチンのスーツをなに気なく、さり気なくひっかける。

日本の若者にもスンナリまねのできる、キャンパス・ファッションだ。

新しいことに大いなる価値を感じるものが多い日本の若者にとって、食いたりなさが残るようだが、流行という魔物に機械的な洗脳を受けることのない、伝統に消化されたファッションも大事にしたいものだ。　《平凡パンチ：吉田弘》

ファッション拝見

メンバー・プロフィール

バリー・ギブ

１９４７年9月1日、イギリスのマン島（オートバイ・レースで有名）のダグラス生まれて、３兄弟の兄貴。

担当はリズム・ギター、ヴォーカル。

好きなアーティストはビーチ・ボーイズ、ブレッド。好きなソング・ライターはバート・バカラック。

３人の中ではいちばんの長身で、スタイルもよく、１９６９年にはイギリスにおけるベスト・ドレッサーNo.1に選ばれている。

彼はモーリス、ロビンと共に多くの名曲を書いている。勿論彼等の歌う曲のすべてが彼等自身のペンによるものだが、「イン・ザ・モーニング」「ラヴ・サムバディー」「ワーズ」その他はエルヴィス・プレスリー、フランク・シナトラ、トム・ジョーンズ、エンゲルベルト・フンパーディンク、ディーン・マーチン、ホセ・フェリシアーノなど多くのアーティストに取りあげられ歌われている。

ビー・ジーズはメロディ・メイカーであり、そしてヒット・メイカーである。

ロビン・ギブ

１９４９年12月22日、同じくマン島のダグラス生まれ。彼とモーリスは双生子である。

担当はヴォーカル。好きなアーティストはビートルズ。

彼の独得な歌い方が、ビー・ジーズの特徴のひとつでもある。いつも歌う時は耳に手を当てて、自分で納得しているように歌う。一方歌っていない時やステージを離れた時は２枚目半で、とても、ゆかいな人間である。

彼は自分の出版社を設立していて、自分で書いた曲や、３人で書いた曲は、その寺の権利を持っている。

モーリス・ギブ

１９４９年12月22日、マン島ダグラス生まれ、担当はベース・ギター、ピアノ、ヴォーカル、好きなアーティストはビートルズ、ステファン・スティルス。

３人の中でいちばん背が低く、３枚目的要素を持っている。彼のベースはポップなフィーリングに溢れ、彼等のサウンドをひき立ている。１９６２年にルルと結婚したが、最近離婚したというニュースが入っている。

彼はビー・ジーズで演奏し、歌うだけでなく、ティン・ティンというグループのプロデュースをしたり、また、最近彼等と一緒にコンサートをしているジミー・スティヴンスのバックを勤めたりしている。

１９６７年に５人でスタートしたこのビー・ジーズは、１人抜け、２人抜けと、メンバーがグループを脱退し、最後にはバリーとモーリスの２人だけになってしまった。しかし、ロビンが再び兄弟のところへ戻り、ビー・ジーズは再スタートした。

再スタート後は「ロンリー・デイ」「傷心の日々」とたて続けにヒットを放ち、ミリオン・セラーとなり、ゴールド・ディスクを貰っている。

ラヴ・サウンズの王者の名に恥じない実力と人気を持っているその秘訣は、バリー、モーリス、ロビン３兄弟の息の合った作詩、作曲、演奏、ヴォーカル、私生活にある。

1942年、リバプールのアラートンで生れる。9才でピアノを弾きはじめ、バディ・ホリー、レイ・チャールズ、ファッツ・ドミノ、アーサー・アレキサンダーに影響を受けながら、独学をつづける。

63年、はじめて作曲した「ベイビー・ザッツ・イット」をリバプールのグループ、ヤング・ワンズで吹込み。この曲は大ヒットにはならなかったが、その後、彼は作詞・作曲に精力を費し、リバプールのパブやクラブなどでピアノの弾き語りをやる〝ジミー〟として有名になった。

それから妻と3人の子供を従え、苦しい生活が長い間つづいた。この間、彼は『本も売ったし、皮の腕時計バンドも作った。鏡工場で働いたこともあれば炭鉱でも働いた。道路の舗装人夫もしたし、種を小包につめる仕事なんてものまでやったものさ。』とユーモアをまじえながら語っている。

71年暮、モーリス・ギブに見出されたことから、レコーディングのチャンスが訪れる。初のアルバムのタイトルは「ドント・フリーク・ミー・アウト」、同年8月にアトランティック・レーベルより発売されたほか、このアルバムより「バイ・バイ・ラブ」がシングル・カットされヒットした。

今は4人目の子供も生れ、新しい家で幸福な毎日を送っている。『この子供は政府の年金の補助は受けずに生れたんだ。』とジミーは語る。『税金で払い戻しをはじめたようなものさ。』と――。

JIMMY STEVENS

ビー・ジーズ：そのディスコグラフィーと代表曲

それぞれの国柄によって好みもまちまちである。国民性の違いが良くあらわれているというべきか。日本人の好む音楽はアメリカ人の好む音楽よりも、イギリス人の好む音楽と良く似ている。

憂いを含んだメロディーを愛し、ロマンチシズムに溢れ自然の美しさと、簡素な美しさを愛してはより庶民的であることを望む。それはイギリス音楽界と日本のポップス・ファンとの間に見いだせる共通点でもある。

「ビージーズ」。これもやはりイギリスと日本が世界中のどの国よりも特に強く支持するグループの1つである。「ビージーズ」の描きだす淡い色彩の偶話の世界は、日本人の心をふるわせる。抵抗もなく、ごく自然に心の中にしみこんでくるその美しいメロディーは永遠に忘れ難い魅力を秘めるもの。どの曲も繊細な美しさに満ち満ちている。

イギリスで発表された曲の殆んどはアメリカでも発表されているが、ヒット・チャートにあらわれたヒット状況を比較してみると、同じ曲でありながらかなりのムラがある。国民性の違いがこんなところにあらわれているのだが、正直いってアメリカでの彼らの成績はイギリスにくらべて大したことはない。アメリカで大したヒットにならなくても日本ではイギリスなみにビッグ・ヒットになるビージーズ。ビージーズはやはり日本人の心に最もフィットしたグループといえるだろう。

彼らの発表したレコードも相当の数になるが、ここではアルバムを通して彼らの代表作を紹介してみたい。

「ビー・ジーズ・ファースト
Bee Gees 1st」MW-2069

オーストラリアからイギリスへ渡り、ローカル・グループから世界のグループへ飛躍するべく1967年7月に発表した第1作目のアルバム。ここからは2曲のビッグ・ヒットが生まれた。

●ニューヨーク炭鉱の悲劇
New York Mining Disaster 1941

イギリスでのデビュー・ヒット。ドキュメンタリーな内容をもつこの曲は、恋をテーマにした作品が多い彼らのヒットの中でも異色の作品といえるだろう。少し暗い陰をもつメロディーが印象的。

●トウ・ラヴ・サムバディ
To Love Somebody

陰りのあるクセの強いメロディーだが美しい旋律はそこなわれておらず、黒っぽいフィーリングで歌うバリーの歌声がこの曲の良さを最大限に生かしきっている。ソウル・ファンにはニーナ・シモン、スィート・インスピレーションズなどのヴァージョンで馴染み深い作品。

HORIZONTAL

廃盤となってしまった2枚目の、1968年2月に発表したアルバムである。1枚目よりは音の整理が行なわれ、サウンドもメロディーも柔らかになっているのが特徴。ここからも2曲がビッグ・ヒットとなった。

●ホリディ／Holiday

イギリスでは「マサチューセッツ」のB面として発表されてヒットし、アメリカでは「マサチューセッツ」とは別々に発表されてヒット。大変に親しみ易いメロディーをもった作品でハーモニーの美しさを強調している。

●マサチューセッツ／MASACHUSETTS

彼らにとっては記念すべき出世作であり、5本の指に数えられる不朽の名作ともいわれる作品。甘く流れるようなメロディー・ラインは美しさが輝やくばかり。ビートルズの再来といわしめた初期の代表作である。

Idea……ATCO S-33-253

1968年9月に発表した4枚目のアルバム。洗練されたハーモニーと実力を備えた彼らがさらに前進するべく、方向と姿勢を変えるため実験的な試みをしはじめた時でもある。ここからは1曲がシングル化された。

●ジョーク／I Started A Joke

これまでよりは幾分複雑なメロディー構成となっている。ロビンのビブラート過多のヴォーカルをメインに高音部での美しさを強調。バック・サウンドを厚くしてはいるが、良く聞きこんでいけばシンプルな美しさをもっていることがわかるだろう。

オデッサ／Oddessa MP-9305〜6

1969年3月に発表された7枚目のLP。固まりそうでなかなか固まらなかったビー・ジーズ・サウンドも小さな実験的試みを経て一応ここにその個性を確立。初の2枚組みという大作で、1度は複雑な厚いサウンドを創造したものの、ここでは一挙にシンプルなサウンドの作品を多くし、リード・ヴォーカルを強調してリリシズムに溢れた音創りを完成させている。このＬＰからは1曲が正式にシングル・カットされ、1曲が映画に使用されたことから日本でのみシングル化されヒットした。

●若葉のころ／First of May

ラヴ・ソングながら物語りを歌詞の中に織りこんだ、いわば悲恋物語りの小品ともいうべき作品。イントロもエンディングも実にあいまいな構成で、ヒット曲のパターンからすれば常識破りの作品でもある。それだけに曲のもつそこはかとない甘い哀愁の香りが強く漂よっており、メロディーの美しさも充分映えている。

●小さな恋のメロディー／Melody Fair

モーリスの愛妻ルルがまず自分のＬＰで取りあげ、次いで映画「小さな恋のメロディー」で主人公の少女メロディーのテーマとして取りあげられ、映画のヒットにより日本でシングル発売された曲。大変に親しみやすいシンプルな、それでいて繊細な動きをみせるメロディー・ラインが印象的だ。

Best of Bee Gees Vol.1
ATCO S-33-292

最初は5人いたメンバーも種々のトラブルから1人抜け2人抜け、ギブ3兄弟だけになったと思ったらロビンが抜け、ついには2人だけが残る——なんていう波乱に富んだ1969年。その69年の10月に発表された8枚目の、そして初めてのベスト・オブＬＰである。ここにはシングル発表だけされていた曲も幾つか収録されているが、その曲とは次の4曲のことである。

●ワールド／World

澄みきった爽やかさというより、ひっそりとしたたたずまいをみせる彼らの作風の美しさ。その魅力がこの曲のすみずみに行きとどいているのが感じられる。華やかさのかわりに憂愁の美をストレートに投げかけてくる味わい深い作品である。

●ワーズ／Words

大変に哀愁をおびたメロディーがいかにもビージーズらしいところ。ハーモニーの美しさも、流れも、高音部での美しさを強調したメロディーの構成も、ヒット曲としては上手いつくり方をしてある。バリーのハリのあるヴォーカルがこの曲に力強さを与えているようだ。

●ジャンボ／Jumbo

軽快なアップ・ビートにのって楽しそうに歌われるこの曲、なんとなくビートルズの影響が見うけられる。彼らには珍らしいタイプの曲といえるだろうが、いかにもヒットを狙った軽いムードが親しみをあたえる。小品というところ。

●獄中の手紙
I've Gotta Get A Message to You

幾分ビートを強めたこの作品は、死刑を宣告された死刑因が死に直面しての苦悩、また恋人を想い苦悩するさまを歌ったもの。彼らは恋の歌を多く歌うが、ときにはこうしたシチュエーションの中での恋の苦悩をテーマにすることもある。ロビンのリードで歌われるため暗さがなく、カラッとした出来になっている。人間の或る断面をとらえた力作といえよう

Cucumber Castle
ATCO S-33-327

ロビンが独立し2人だけになってしまったビー・ジーズの、1970年4月に発表した9枚目のＬＰ。彼らが企画制作したＴＶ映画をベースにしたＬＰであるところから、1部の曲にはロビンの歌声も聞かれる。全体に静かな曲が多くリラックスしたムードで楽しめるＬＰだ。ここからは3曲がヒット化している。

●想い出を胸に
Don't Forget To Remember

重く流れるバック・サウンドに爽やかなバリーの唱法をのせた、これも美しいメロディーの作品である。アンニュイなムードで終始する曲だが、サラッとしたヴォーカルで上手くまとめ、独自の魅力を打ちだしたナンバーといえるだろう。日本人受けする曲だ。

●If Only I Had My Mind

淡々とした素朴な作品だが、憂いを含んだメロディーをバリーが力唱。しんみりとした優しさに溢れた良い作品になっている。シンプルにまとまった感じでヴォーカルの魅力を充分に伝えてくれる構成も良い。

●アイ・オー・アイ・オー／I.O.I.O.

このＬＰの中でも特にリズムを強調した曲がこの作品だった。彼らが発表したシングルの中でもこの曲だけが特に軽快な味をもっている。ミディアム・ビートにのって歌われるメロディーも美したを失ってはおらず、日本でもビッグ・ヒットになった楽しい曲だ。

ロンリー・デイズ 2 Years On
MP-2165

録音活動の上では実質約1年の空白の後に発表されたＬＰ。再び3人兄弟が勢ぞろいしての再スタートを高らかに告げるＬＰでもある。1970年12月に発表された10枚目のこのＬＰでは、ＬＰの内容そのものに重点を置こうという姿勢が感じとれる。バラード・タイプの曲からヘビーなスワンプ・タイプの曲まで、幅の広い選曲がしてあり、ここからは1曲だけがシングル化された。

●ロンリー・デイズ／Lonely Days

彼らにとっては初の全米No.1の座を獲得した記念すべき作品。また 100万枚を売りゴールド・ディスクをも獲得している。ソフィスケーティケッドなムードの中にも、歯切れの良さを忘れない親しみ易い作品といえるだろう。

トラファルガー／Trafalger
MP-2215

前作ＬＰで参加していたドラマー、ジョエフ・ブリックスとリード・ギタリスト、アラン・ケンドールを正式にバック・スタッフに迎えてのＬＰ。1971年11月に発表した11枚目のＬＰである。ネルソン提督のトラファルガー戦をもとに、独立した曲によるトータルＬＰという試みを実現させた意欲作だ。シャープなリズム感覚を前面におしだした構成だが、3人3様のヴォーカルで個性を打ちだすなど、細かな配慮をなした出来の良いＬＰである。

●傷心の日々
How Can You Mend A Broken Heart

「ロンリー・デイズ」に次ぎ2枚目の全米No.1ヒットとなった作品で、これもゴールド・ディスクを獲得している。地味だがしっとりとした輝やきをみせる優れた作品である。思いっきり静かなムードの中に彼らのリリシズムを余すところなく注ぎこんだ、5本の指に数えていい曲である。

●過ぎ去りし愛の夢

Don't Wanna Live Inside Myself

沈んだムードが、独特の美しさをひきだすバリー得意のスタイルが良く生かされた作品。地味ながらこの曲の魅力を理解する人は相当のビー・ジーズ・マニアといえるだろう。センチメンタリズムに縁どられたバラードだ。

ラン・トウ・ミー
ザ・ビー・ジーズの新しい夜明け
To Whom It May Concern
MP-2274

アコースティックなサウンドからダーティ・ロックまで、かなり多面的なイメージを追求しているのが目だつLP。1972年6月に発表した12枚目の作品である。ヴォーカルの魅力とハーモニーの魅力、そしてバック・サウンドとのアンサンブル。そのバランスのとれた完成度は立派にLPアーティストであることを証明する。そしてまた永遠のロマンを保持し独自の個性を力強く訴えかけるLPでもある。ここからは3曲がシングル化された。

●ラン・トウ・ミー／Run to Me

いかにもビー・ジーズらしいロマンチシズムに溢れた、甘く夢みるような、ほんのり哀愁を漂よわせる作品である。コーラスで広がりをもたせた構成も、彼らが相当の実力をたくわえてきたことが良くわかる。

●アライヴ／Alive

ゴスペルっぽいピアノをフィーチュアしたこの曲は暗い陰りをもった作品。バリーのヴォーカルが効果をあげるのは大体こういった作品に多いが、堂々と力唱するバリーの歌声でスケールの大きなバラードに完成している。

●ほほえみの海

Sea of Smiling Faces

厚いストリングスとキーボードにアコースティック・ギターという、メロディーを豊かに奏でるバック・サウンド。バリーとロビンの息のあったハーモニーでゆったりと歌いあげる可愛いい感じの作品。

ライフ・イン・ア・ティン・キャン
Life In A Tin Can MW-2066

今年の3月に発表された13枚目のLP。アメリカで初めて録音し完成させたLPでもある。そしてまた初めて自分たちだけでプロデュース。アレンジはジャズ畑の人、そしてバックには珍しく有名なミュージシャンを多数起用するなど、彼らとしては大幅なサウンド改革を期待して実験を試みた。いわば新生ビー・ジーズを確立させるLPでもあるわけ。ここからは1曲がシングル化されている。

●希望の夜明け

Saw A New Morning

アコースティック・ギターの素朴さに、重厚なストリングスで力強い仕上げがほどこしてある。コーラス・グループとしての実力を存分に発揮できるように作られた曲のようだが、切れ味の良い澄んだ空を思わせるサビの部分のメロディーが印象的だ。

ベスト・オブ・ビー・ジーズ Vol 2
MW-2073

今年6年に発表されたベストLPの2枚目。そして14枚目に相当するLPでもある。内容は再活動後に放ったビッグ・ヒット「ロンリー・デイズ」以後のヒット曲を中心に、過去のLPからも数曲ピック・アップして構成。「メロディ・フェアー」「アライヴ」などの曲目も入っているが、中でも次の3曲が加わっているのはうれしい。

●マイ・ワールド／My World

スロー・ミディアムのナンバー。前半をロビンが、後半をバリーがリード・ヴォーカルを担当したメロディアスな作品。ハーモニーの美しさを強調した構成と、次第に盛りあがっていくドラマチックな仕上げで実力を発揮。

●救いの鐘／Saved By the Bell

ロビンが独立活動を始めて放った第2弾ヒット。コーラスとストリングスでロビンのヴォーカルをつつみこむような感じで仕上げた、ナイーブな感覚にあふれる作品である。ロビンお得意の正調派をきどった唱法が聞かれる。

●イン・ザ・モーニング

Morning of My Life

映画「小さな恋のメロディー」で効果的に使われていた作品。バラード仕立でバリーのハスキーな声を上手く生かした、少々センチメンタルなムードの曲。1日を人生にたとえた歌詞の美しさが心にしみる佳曲である。

この他にも発売されているLPはある。イギリスではオーストラリア時代の作品を集めたLP "Rare, Precious Et Beautiful" Vol.1, Vol.2, Vol.3 と計3枚が発売されており、日本ではほぼ同じ内容によるLPとして、2枚組みの「ノスタルジア／ザ・ビー・ジーズ」MP-9409～10が発売されている。

また映画のサウンド・トラックとして「小さな恋のメロディー／ザ・ビー・ジーズ」MP—2172が発売されており、ここには渡英する直前にオーストラリアで放ったビッグ・ヒット「スピックス・アンド・スペックス／Spicks & Specks」が収録されている。

この「スピックス・アンド・スペックス」はちゃんと紹介しなかったが、もう1曲だけ全LPからもれているために紹介できなかった曲がある。タイトルは「トゥモロー・トゥモロー」。これは69年5月、「若葉のころ」のすぐ後に放ったヒット曲である。

そして今、アメリカでは最新作 "Wouldn't I Be Someone" がヒット中。そしてまた近々この曲を収めた1枚目の最新録音によるLPが発売される予定である。

それではイギリスでのデビュー曲から今日までに発表した全レコードのディスコグラフィーを紹介しておこう。(　)内はアメリカ・ビルボード誌によるランキングである。

《SINGLE》

- New York Mining Disaster 1941 (67.5.27—⑭)
- To Love Somebody(67.7.15—⑰)
- Holiday(67.9.30—⑯)
- Masachusettes(67.11.11—⑪)
- World
- Words(68.1.20—⑮)
- Jumbo(68.4.6—(57))
- Ive Gotta Get A Message To You (68.8.17—⑧)
- I Stared A Joke(68.12.21—⑥)
- First of May(69.3.22—㊲)
- Tomorrow Tomorrow(69.5.31—(54))
- Saved By the Bell(ロビン・ギブ)
- Don't Forget To Remember (69.9.20—(73))
- If Only I Had My Mind On (70.3.28—(91))
- I. O. I. O.(70.7.11—(94))
- Lonely Days(71.1.2—①)
- How Can You Mend A Broken Heart(71.8.13—①)
- Don't Wanna Live Inside Myself
- My World
- Run to Me(72.9.30—⑯)
- Alive(72.12.16—㉞)
- Saw A New Morning (73.3.24—(99))
- Wouldn't I Be Sameone(上昇中)

- Melody Fair(日本のみ)
- Morning of My Life(日本のみ)
- Sea of Smiling Faces(日本のみ)

《Album》

- Bee Gees 1st……67年7月発売
- Horizontal…………68年2月発売
- Rare, Precious & Beautiful…… 68年4月発売
- Idea…………………68年9月発売
- Rare, Precious & Beautiful Vol.2……………… 68年11月発売
- Rare, Precious & Beautiful Vol.3……………… 69年2月発売
- Odessa……………… 69年3月発売
- Best of Bee Gees Vol.1…… 69年10月発売
- Cucumber Castle‥70年4月発売
- Two Years On……70年12月発売
- Trafalger………… 71年11月発売
- To Whom If May Concern…… 72年10月発売
- Life In A Tin Can…… 73年3月発売
- Best of the Bee Gees Vol.2…… 73年6月発売

- Sound Track "Melody Fair"……
- Nostalgia………… 72年5月発売

全ヒット曲を殆んど網羅したLPとしては2枚組みの「マイ・ワールド／ザ・ビー・ジーズ・ベスト・コレクション」MP—9403～4が最適である。収録された24曲は彼らの足どりをストレートに伝えてくれる選曲となっている。

《音楽評論家：三浦 恵》

ビー・ジーズと映画音楽

ビー・ジーズといえばそく、映画「小さな恋のメロディ」の主題曲 "メロディ・フェア" をおもい出すかたが多いことでしょう。スクリーン・ミュージックとは、「映像と音楽が同時に呼吸する」ものです。それにヒット・ソングと映画のかかわり合いもまた、切っても切れない関係にあります。ヒットしていた曲を映画にとりいれて、改めて決定的な大ヒットとなった、ビー・ジーズの歌う "メロディ・フェア" や "若葉のころ" といったナンバーは、今では、ポピュラー・ミュージックのスタンダード・ナンバーとなっているほどです。こうした例は、ほかにも超大物で前にありました。それはサイモンとガーファンクルのヒット曲を使った、1967年製作、日本封切68年のアメリカ映画「卒業」です。

1972年3月以来、2度目の来日公演をしたイギリスの人気兄弟チーム、ビー・ジーズのヒット・ナンバーを使った作品、それは1971年のイギリス映画「小さな恋のメロディ」です。

製作者デビッド・パトナムは70年にローリング・ストーンズのミック・ジャガー主演映画「パフォーマンス」を作って以来、これが2本目で当時29才でした。監督のワリス・フセインは33才、メイン・スタッフの平均年令27才というヤング・パワーが、ビー・ジーズのヒット・ナンバーやクロスビー・スティルス・ナッシュ・アンド・ヤングの歌を映画にとり入れる原動力となったのでした。

ここで映画「小さな恋のメロディ」を想い出してみましょう。イギリスのパブリック・スクールに、お金持の家のこどもで美少年のダニエル・ラテイマー（マーク・レスター）と、ガキ大将つまり番長でソバカスだらけの貧しい少年トム・オーショー（ジャック・ワイルド）がいました。2人は同級生で11才、ダニエルは気が弱いし、トムはとてもむこうっ気の強いイタズラ坊やです。この2人なぜかとっても気が合ってすごーく仲良しです。もちろん女のこのことよりもいたずらが面白くて仕方がありません。こどもたちの世界はのびのびとしていて生き生きとした毎日です。

ある日ダニエルはバレエのレッスンをしている女生徒たちをのぞいていて、とってもかわいらしい女のこを見つけました。それからというものは、仲良しのトムのさそう遊びにも身がはいらないし、せつない片想いがつづき勉強も気もそぞろ、おとなもこどもも「恋」って不思議なものですネ。ダニエルは運動会の時にも、愛する彼女の顔をおもいうかべて夢中で走って、1等になってしまうほどです。

彼女の名前はメロディ（トレイシー・ハイド)、ダニエルはいつもメロディのあとをついて歩くしまつですし、メロディも女ともだちからダニエルの恋心を知らされて、だんだんにダニエルが好きになります。トムもほんとはメロディが好きなんです、ダニエルとトムが宿題を忘れて、受持ちの先生からぴしゃりぴしゃりとしたたかにお尻をたたかれた午後、泣きべそ顔で教室から出てくると、階段の下に、涙をためてやさしくほほ笑むメロディが待っていたのです。やきもちをやいてダニエルを引きとめるトムをおいて、メロディとダニエルは走って行ってしまいます。

ダニエルとメロディは、美しい若葉がかがやく木もれ陽の射す、静かで明るいお墓でデイトします。ダニエルは「ねえ、ぼくと結婚しない？」「ええいつかね、でもどうしておとなって、結婚するとダメになっちゃうのかしら」「きっとわかりすぎるからだと思うなぼくは……」「そうね、全部わかっちゃうからだわ」。

翌日ふたりは学校を休んで、海辺へあそびにゆきました。夏の太陽と潮風をあびて思いきり楽しみました。次の日、学校を休んだことを叱られて先生からお説教された2人は、はっきりと宣言します、「ぼくたち結婚します」。さあーたいへん、蜂の巣をつついたような大さわぎになったのは、先生たちのほうです。

教室に帰ってきたダニエルたちをからかったのはトムです。親友のトムとダニエルの取っ組みあいの大げんかが初まります。でもトムはまじめなダニエルの恋心を知ってあやまり、2人を結婚させてやろうと言い出します。

ダニエルの母親から「ふたりは駆け落ちしました」という電話を受けた学校では、昼休みが終ってももどらない生徒たちを探しはじめます。いっぽうこどもたちは全員、学校を抜け出して原っぱにくり出します。必死になって追う先生たち、逃げる生徒たち、息をきらせる先生や父母たちで、てんやわんやの大さわぎになります。2人はやがて原っぱに1本とおっているトロッコに乗って漕ぎながら、花咲きみだれる野原をはるか遠くへ去ってゆくのです。

ビー・ジーズのナンバーは10曲つかわれています。主題曲の "小さな恋のメロディ" 「メロディー・フェア」は愛らしいメロディのテーマでもあるわけで、彼女が買った金魚を、遊びにゆく途中、街にそなえつけてある石の水を満したいれもののなかに放してみたりするシーンに、ビー・ジーズの歌で流れます。また "若葉の頃" は ダニエルとメロディがお墓で楽しく愛らしいデイトをする語らいのときに、さわやかな明るい歌声で、たいそう印象的に使われます。そして、ダイナミックなビートをきざむ "シーサイド・バンジョー" は、映画でも演奏をうけもっている、リチャード・ヒューソン作曲のインストゥル・ナンバーで、ふたりが海辺で元気いっぱいに遊ぶシーンに流れます。

なお、野の草花で作った花束やかんむりでクラスメートの女の子たちが、結婚式のにぎやかにしたくする間、男の子たちは会場づくりに大わらわしますが、そこへ先生たちが追いかけてきます。そんなシーンに皮肉たっぷりでユーモアをこめて歌われるのが、クロスビー・スティルス・ナッシュ・アンド・ヤングの "ティーチ・ユア・チルドレン" です。そしてこどもたちがワァーッと先生たちを逆襲するあたりのナンバーが、リチャード・ヒューソン作曲でリチャード・ヒューソン・オーケストラ演奏による "先生を追いかけろ" なのです。

ほかにもダニエルがメロディへの片想いになやむときなどに "ラブ・サムバディ" が歌われます。そして "イン・ザ・モーニング" などがそれぞれに印象的なシーンに流れます。

製作者のデビッド・パトナムは「この作品は一種のミュージカル映画と考えていただきたいのです。なぜならば、音楽こそは世界の共通語ですし、音楽による人との対話によって、愛と平和の心のつながりのある世界を創り出すことができるのですから」と語っています。その意味からもビー・ジーズの作詞・作曲して演奏し歌った映画「小さな恋のメロディ」における多くのナンバーが、フレッシュでみずみずしい映画にあたえた魅力が、どれほど大きかったかということが、映画の大ヒットで証しとなったことがわかります。

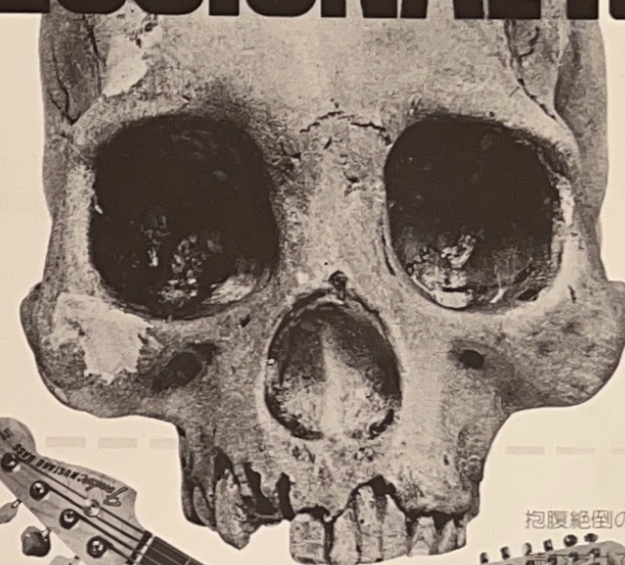
なお末弟でブロンドのモーリス・ギブ夫人のルルも、1973年リバイバルしたシドニー・ポワチエ主演映画「いつも心に太陽を」に出演して主題歌を歌いました。ルルはもともと若手人気歌手です。彼女は映画初出演でおませな不良少女のボス役でのちにまともな生徒になる役を演じました。これは現ギアナ国連大使が青年時代に教師としてロンドン下町の学校につとめ、乱暴で下品な手のつけられない生徒たちを普通の生徒たちに教育しなおして学校を去るまでの、愛と感動の実話の映画化作品です。

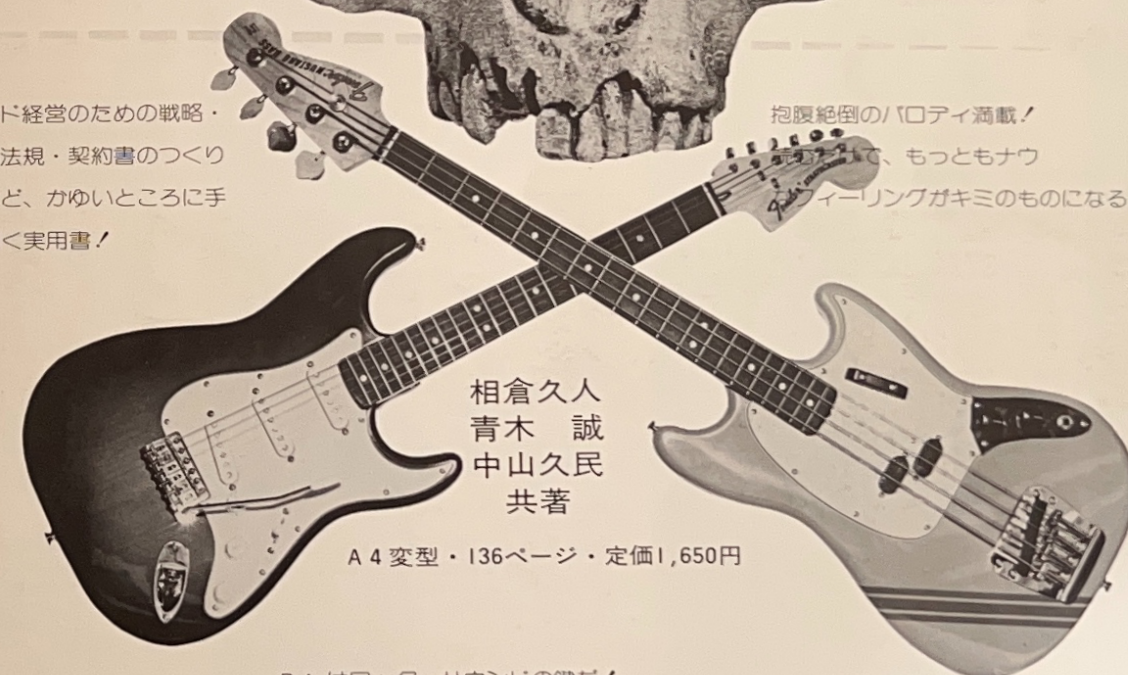
昨年の来日コンサートの夜、客席の扉のわきに立ちつくしていたルルは、日本での聴衆の大きな拍手や、かん声に湧くビー・ジーズのコンサートに、ある時は笑いながら、時に眼をしばたいて心から嬉しそうに、感激して耳をかたむけていた姿が、わたくしには今も深い感動とともに、つい昨日のことのように想い出されます。

《音楽評論家：岡部迪子》

素材に、デザインに、心をこめたマリムラ秋のコレクション。お求めは●本社＝東京都世田谷区玉川田園調布1-14-11〒158☎(03)721-7171～9 チェーン店＝東京
●銀座西5番街☎(03)571-6638●銀座コアビル2F☎(03)572-7728●新宿ステーションビル3F☎(03)354-7305●渋谷東急プラザ5F☎(03)463-3908●パルコ
池袋3F☎(03)987-0495●自由が丘☎(03)717-5001・5005/横浜●ダイヤモンド地下街☎(045)311-3638/浜松●遠鉄名店ビル1F ☎(0534)53-6438/名古屋
●名鉄メルサ1F☎(052)582-6961/大阪●阪急3番街B1☎(06)372-6958●阪急ファイブ1F☎(06)312-8347●銀座アイ・マリオ☎(03)571-3062・3061

ラブ・サウンズのキョードー東京が
書籍出版をはじめました
どうぞよろしく

PROFESSIONAL ROCK

バンド経営のための戦略・関係法規・契約書のつくり方など、かゆいところに手の届く実用書！

抱腹絶倒のパロディ満載！ ……で、もっともナウフィーリングがキミのものになる！

相倉久人
青木 誠
中山久民
共著

A 4 変型・136ページ・定価1,650円

P.A.はロック・サウンドの鍵だ！
来日ミュージシャンのマイク・アレンジ、P.A.ダイアグラムを特別公開！——ミッチ・ミラー合唱団、ビートルズ、エルトン・ジョン、ジェームス・テイラー、セルジオ・メンデスとブラジル'66 and '77 アンディ・ウィリアムス、沢田研二

発行 株式会社キョードー東京 107 港区北青山3-6-18 共同ビル10階 ☎ 03-407-8131 振替：東京98240・キョードー

ラブ・サウンズのコンサート情報は 〈ハイ・ミュージック〉 をご購読ください。 1年間6冊発行で送料共900円

ビー・ジーズ年代譜
BEE GEES

1945

8月18日 ● 元メンバーのビンス・メロニー、オーストラリアのシドニーで生れる。

1946

3月24日 ● 元メンバーのコリン・ピーターセン、オーストラリアのクイーンスランドで生まれる。

9月1日 ● イギリス、マン島ダグラスでバーバラ、ヒュー・ギブ夫妻の間に長男のバリー誕生。

1948

5月2日 ● 元ドラマー、ジョフ・ブリッジフォード、オーストラリアで生まれる。

1949

12月22日 ● ロビン・ギブ、モーリス・ギブの双子の兄弟誕生。

1956

● ギブ兄弟、アマチュア、ロック・グループを結成。

1958

● ギブ一家、イギリスからオーストラリアのブリスベーンへ移住。

● ブリスベーンのローカル・ステーション4KQの「タレント・ゲスト」という番組に出演。

1960

3月 ● ブリスベーンのABCテレビから30分のレギュラー番組 "Anything Goes" に出演。

1963

1月 ● ギブ兄弟「三つのキス "Three Kisses of Love"」〔バリー作曲〕でフェスティヴァル・レコードからデビュー。

春 ● 「三つのキス」に続く第2弾「ティンバー"Timber"」を発売、この曲はオーストラリアでビッグ・ヒットとなり、ギブ兄弟の名を一段と高める。

夏 ● 第3弾シングル「閉所恐怖症"CLAUSTROPHOBIA」を発売。

1964

● 「ワインと女 "Wine And Woman"」、「アイ・ワズ・ア・ラヴァー "I was a Lover"」のシングルがたて続けにヒット。

● この頃、前記のヒット曲を収めたLP「ビー・ジーズ若き日の想い出」、「ビー・ジーズ・ヒット・アルバム〔オーストラリアの想い出〕」をフェスティヴァル・レコードからリリース。

1965

● オーストラリアで "最優秀作品賞" を受賞。

1966

● オーストラリアで65年に続き2年連続"最優秀作品賞"を受賞、更に最優秀オーストラリア・グループにえらばれる。

1967

2月 ● オーストラリア時代最後のヒット曲「スピックス・アンド・スペックス "Spicks & Specks"」、No.1となる。〔この曲はイギリスでのデビュー盤となり、オランダでもNo.1のヒット曲になる。〕

● ギブ一家、オーストラリアから再びイギリスにもどる。

2月24日 ● ビートルズのマネージャーであった故ブライアン・エプスタインが主宰していたネムズ・エンタープライズのマネージング・ディレクター、ロバート・スティグウッドと5年間の契約を結びオーストラリア生まれのコリン・ピーターセン、ヴィンス・メロニーを加え、ビー・ジーズ、デビュー。

5月5日 ● 「ニューヨーク炭鉱の悲劇 "New York Mining Disaster 1941"」を発売、同時にアトコ・レコードと25万ドルの契約を結ぶ。

5月20日 ● 同曲「メロディ・メーカー紙〔以下MM紙と略す〕」で17位にランク。

5月26日 ● 同曲「キャッシュ・ボックス誌〔以下CB誌を略す〕」早くも73位。

7月1日 ● 同曲CB誌で最高17位、「ビルボード誌〔以下BB誌と略す〕」では14位。

夏 ● オーストラリア国籍のままイギリスで演奏してはいけないということでファン騒ぐ。

8月26日 ● シングル「ラヴ・サムバディ "To Love Somebody"」〔日本でのデビュー曲〕CB誌で25位、BB誌では17位まで上昇。

9月2日 ● 同曲CB誌で24位にランク。

10月14日 ● オーダーだけで25万枚を突破した「ホリディ"Holiday"」CB誌で48位。

10月21日 ● 日本でも最大のヒット曲となった「マサチューセッツ"MASSACHUSETTS"」ニュー・ミュージカル・エクスプレス紙〔以下NME紙と略す〕、MM紙で共に第1位となる。

11月4日 ● アメリカでは「ホリディ」がCB誌で14位、BB誌で21位。

11月22日 ● NME紙に「ワールド"World"」初チャート19位。

11月25日 ● MM紙でも同曲27位に初チャート。

12月9日 ● 「マサチューセッツ」CB誌で11位。

1968

1月 ● アメリカでは予約注文だけで10万枚を突破したデビュー・アルバム「ザ・ビー・ジーズ・ファースト」〔ニューヨーク炭鉱の悲劇、ホリディなど全14曲を収録〕日本で発売、シングル「マサチューセッツ」も大ヒット。

1月31日 ● MM紙で「ワーズ "Words"」25位に初チャート。

2月2日 ● 初めてのアメリカ公演をハリウッド近くのアナハイム・コンヴェンション・センターで2回行う。
その収益は2万5千ドル以上にのぼり、彼らは公演後1週間カリフォルニアに滞在。

2月17日 ● 「ワーズ」CB誌で最高27位まで上昇。

2月26日 ● ビー・ジーズのミュージカル・ディレクター、ビル・シェファードが指揮する20人のイギリスのミュージシャンからなるオーケストラと共にドイツ公演を行う。〔3月12日まで〕

3月29日 ● イギリス、リーズのタウン・ホールでコンサート。〔ゲストはグレープ・フルーツ、ディブ・ディ・グループ、なお4月21日から27日まではファウンディションズ〕

3月30日 ● チェスターABCにてコンサート。

3月31日 ● マンチェスター・パレスにてコンサート。

4月1日 ● レチェスターのドゥ・モンフォール・ホールにてコンサート。

4月4日 ● ケンブリッヂのリーガルにてコンサート。

4月5日 ● スロウのアデルフィにてコンサート。

4月6日 ● シェフィールドのシティ・ホールにてコンサート。

4月7日 ● バーミンガムのハイポドロームにてコンサート。

4月10日 ● カーライスルABCにてコンサート。

● 「マサチューセッツ」「ワールド」などを収めたLP「マサチューセッツ／ザ・ビー・ジーズ」日本で発売。

4月11日 ● グラスゴーのグリーズ・プレイハウスにてコンサート。

4月12日 ● エジンバラABCにてコンサート。

4月13日 ● ストックトンABCにてコンサート。

● シングル「ジャンボー "Jumbo"」MM紙で27位にチャート。

4月14日 ● リバプールのエムパイアにてコンサート。

4月17日 ● ポーツマスのガイド・ホールにてコンサート。

4月19日 ● ハンレーのゴーモントにてコンサート。

4月20日 ● バルトンのオデオンにてコンサート。

● CB誌で「ジャンボー」54位、BB誌は57位。

4月21日 ● ハルABCにてコンサート。

4月22日 ● リンカーンABCにてコンサート。

4月24日 ● サリスベリーのオデオンにてコンサート。

4月25日 ● ロンフォードのオデオンにてコンサート。

4月26日 ● エクスターのオデオンにてコンサート。

4日27日 月 ● カーディフのキャピトルにてコンサート。

4月28日 ● トゥーティングのグラナダにてコンサート。

5月1日 ● ヨークのサヴィイにてコンサート。

5月2日 ● ダブリンのアデルフィにてコンサート。

5月3日 ● ベルファーストABCにてコンサート。

6月11日 ● ドラマーのコリン・ピーターセン、マネージャー秘書のジョアン・ニュートン(23才)と結婚。

7月末 ● アメリカへコンサート・トウアーに向かう予定がロビン・ギブのノイローゼで延期。

8月2日 ● イギリスで「獄中の手紙"I've Gotta Ge ta Message To You"」をリリース。

8月31日 ● 同曲NME紙で2位、MM紙で3位にランク。

9月1日 ● 「獄中の手紙」「ジョーク」「ジャンボー」などを収めたアルバム「アイディア／ザ・ビ・ジーズ」イギリスでリリース。

10月5日 ● 同アルバムCB誌LPチャートで13位。

10月〜11月 ● 「キッチナー卿の小さなドラマー少年」の撮影のためケニアへロケ。

12月 ● メンバー、オーストラリアに戻る。

12月4日 ● ロビン、18才のモーリー・フリーズと結婚。〔結婚へ進展するきっかけは、一年前の列車事故の時、ロビンが彼女を助けたということ〕。

12月10日 ● LP「アイディア」日本で発売。

12月中旬 ● モーリス、イギリスにもどりルルとの婚約を発表。

● ヴィンス・メロニー、グループを脱退。

1969

2月8日 ● 「ジョーク "I Started A Joke"」 CB誌で6位。

2月 ● 脱退したヴィンス・メロニーのプロデュースにより、ニュー・グループ、アシュトン・ガードナー&ダイク、デビュー。

2月第2週 ● 「若葉のころ"First of May"」イギリスでリリース。

2月18日 ● ルルとモーリス結婚。

3月1日 ● 「若葉のころ」「メロディ・フェア」などを収めた彼らのはじめての2枚組トータル・アルバム「オデッサ」CB誌で初ランク56位。

3月22日 ● 「若葉のころ」、MM誌で7位、NME紙では8位にランク。

3月29日 ● 「オデッサ」CB誌で最高20位。

4月19日 ● 「若葉のころ」CB誌で18位。

4月 ● ロビン・ギブ、グループを脱退。

5月28日 ● モーリス、家の近くでロールス・ロイスを運転中、事故をおこし軽いケガをする。

5月31日 ● 3人になったビー・ジーズのシングル「トゥモロウ・トゥモロウ "Tommorow Tommorow"」CB誌で51位。

6月21日 ● 同曲NME紙で25位。

6月27日 ● ロビン・ギブ初のソロ・シングル「救いの鐘 "Saved by The Bell"」イギリスでリリース。

夏 ● ドラマのコリン・ピーターセン、グループを脱退。
メンバーはバリーとモーリスの2人となる。

● バリー69年度ベスト・ドレッサーNo.1に選ばれ 500ポンドの銀製の像を授与さる。

8月23日 ● 「救いの鐘」、NME紙で2位、MM紙でも2位。

8月30日 ● 「想い出を胸に "Don't Forget To Remember"」NME紙で12位、MM紙で11位、CB誌で76位初チャート。

9月 ● TV映画「キューカンバー・キャスル "きゅうりのお城"」の撮影に入る。

9月10日 ● 「トゥモロウ・トゥモロウ」日本で発売。

9月20日 ● 「想い出を胸に」、NME紙で2位。

9月27日 ● 同曲MM紙で2位。

秋 ● アルバム "The Best of Bee Gees"ゴールド・ディスクを受ける。

● バリーとモーリス、ニューレーベルGEE GEEを創立。

1970

1月 ● バリーとモーリス共演のテレビ用映画「キューカンバー・キャスル」、68年暮から13週間にわたって、イギリス、アメリカで放映。

3月10日 ● ロビン・ギブの第2弾ソロ・シングル「ミリオン・イヤーズ"A Million Years"」日本で発売。

5月10日 ● ロビン・ギブの第3弾シングル「夏と秋の間に」日本で発売。

6月10日 ● ロビンのソロ・アルバム「救いの鐘／ロビン・ギブ」日本で発売。

7月10日 ● アルバム「キューカンバー・キャスル」日本で発売。同時にシングル・カットした「アイ・オー・アイ・オー "I.O.I.O"」がヒット。

● モーリス、バリーとのコンビを続けながらソロ・シングル「レイルロード "Railroad"」日本で発売。

8月10日 ● バリー・ギブのシングル「"I'll Kiss Your Memory"」、日本で発売。

夏 ● この頃バリーとモーリス、「小さな恋のメロディ」のサウンド・トラックやバーバラ・ウィンザーと共演の、"Sing A Rude Song" に出演、また音楽を担当。

● ロビン・ギブ・グループ脱退後17ケ月ぶりにバリーとモーリスのもとにもどる。

9月1日 ● バリー、リンダ・グレイ(20才)と結婚。

9月30日 ● ギブ兄弟が再び一緒になって初めてのアルバム「トゥー・イヤーズ・オン」からのシングル「ロンリー・デイ "Lonely Days" をイギリスでリリース。

10月31日 ● ビー・ジーズ再結成後初めてLW-TVに出演。

11月27日 ● アルバム「トゥー・イヤーズ・オン」、イギリスでリリース。

12月12日 ● イギリスのラジオ・キャンペーン「STAMP OUT TONY BLACK BURN」に出演。

12月26日 ● 映画「キューカンバー・キャスル」、ブラインド・フェイスのハイド・パークにおけるコンサートのフィルムと共に放映される。

1971

1月16日 ● 「トゥー・イヤーズ・オン」、CB誌LPチャート84位に初ランク。

1月30日 ● 「ロンリー・デイ」、ドーンの「ノックは3回」に代ってCB誌で第1位となり、同時にRIAA公認のミリオン・セラーとなる。

2月〜4月 ● アメリカを始め、イギリス、東南アジア、ヨーロッパ諸国、オーストラリア等でコンサート・トゥアーを行う。

5月10日 ● アルバム「トゥー・イヤーズ・オン」、「ロンリー・デイ／ザ・ビージーズ」として日本で発売。

6月26日 ● ヘラルド映画「小さな恋のメロディ」〔ワリス・フセイン監督、マーク・レスター、ジャック・ワイルド、トレーシー・ハイド主演、ビー・ジーズ、サウンド・トラックを担当〕
日本で公開、「ある愛の詩」をしのぐほどのロング・ランとなり秋まで続映。

6月〜9月 ● 同時に主題歌「メロディ・フェア "Melody Fair"」大ヒット。

8月 ● 元ティン・ティンのドラマー、ジョフ・ブリッジフォード、ビー・ジーズに加わる。

8月10日 ● シングル「傷心の日々」日本で発売。

8月14日 ● 「傷心の日々」"How Can You Mend A Broken Heart" CB誌で第1位、「ロンリー・デイ」に続くRIAA公認のゴールド・ディスクとなる。

9月 ● アメリカでコンサート・トゥアーを行う。

9月25日 ● 「傷心の日々」「イスラエル」などを収めたLP「トラファルガー」、アメリカで発売。CB誌LPチャート62位初登場。

10月10日 ● シングル「イン・ザ・モーニング "In the Morning"」日本で発売。

10月23日 ● 「トラファルガー」CB誌で最高18位にランク。

1972

1月15日 ● シングル「マイ・ワールド "My World"」イギリスでリリース。

● アルバム「トラファルガー」の中の曲「過ぎ去りし愛の夢 "Don't Wanna Live Inside Myself"」日本で発売。

1月22日 ● 「マイ・ワールド」CB誌初登場50位。

1月27日 ● ニュージーランドのオークランドで公演。

1月29日 ● オーストラリアのメルボルンにて公演。

1月30日 ● シドニーにてコンサート。

2月1日 ● ブリスベーンにてコンサート。

2月3日 ● アデレードにてコンサート。

2月4日 ● パースにてコンサート。

2月5日 ● 「マイ・ワールド」CB誌チャート3週目で34位。

2月25日 ● オランダ公演。

● アムステルダムのテレビにゲスト出演。

2月26日 ● 「マイ・ワールド」CB誌18位。

3月4日 ● 同曲CB誌15位。

3月9日 ● インドネシアのジャカルタにてコンサート。

3月10日 ● 「マイ・ワールド」日本で発売。
同時に2枚組来日記念アルバム「マイ・ワールド／ザ・ビー・ジーズ、ベスト・コレクション」発売。

● 今日から13日までシンガポール、香港公演。

3月20日 ● 初の来日

● ドラマーのジョフ・ブリッジフォード脱退

3月22日 ● 記者会見とレセプションが東京ヒルトン・ホテルで行われた。席上ポリドール(株)より「小さな恋のメロディ」の大ヒットを記念してバリー、ロビン、モーリスにゴールド・ディスクを贈る。

3月23日 ● 渋谷公会堂でコンサート

3月24日 ● 武道館でコンサート

3月25日・26日 ● 大阪フェスティヴァル・ホールでコンサート

3月28日 ● 次のコンサート地のクアラルンプールへ出発。

4月 ● ニュー・アルバムのレコーディングをロンドンで始める。

7月7日 ● 「ラン・トゥ・ミー "Run To Me"」イギリスで発売。

10月 ● 「ビー・ジーズの新らしい世界 "To Whom It May Loncenn"」 イギリスで発売。

10月23日 ● 「アラキヴ "Alive"」イギリスで発売。

11月21日 ● 「ほほえみの海 "Sea of Smiling Faces"」日本で発売。

1973

2月19日 ● イギリス・ロイヤル・フェスティヴァル・ホールでロンドン・シンフォニーをしたがえコンサート。

3月1日 ● 彼等のプロデューサーであり、また所属プロダクションの社長であるロバート・スティッグウッドが新レーベル "RSO" を設立し、E・クラプトン、J・ブルース、WB&L、リック・グレッチ達とともに、ポリドールよりRSOへ移る。

● アルバム「ライフ・イン・ア・ティン・キャン "Life In A Tin Can"」 発売。

3月30日 ● 「希望の夜明け "Saw A New Morning"」 イギリスで発売。

4月 ● アメリカNBC—TVの、「ミッドナイト・スペシャル」出演。

6月 ● イギリス国内コンサート。

6月22日 ● 「ひとりぼっちの夏」"Wouldn't I Be Someone" とアルバム「ベスト・オブ・ビー・ジーズ・VOL II」イギリスで発売。

7月28日 ● アメリカNBC—TV「ミッドナイト・スペシャル」へ再び出演。

9月 ● 2度目の来日。

11月 ● ニュー・アルバムがイギリスで発売予定。

傷心の日々／アイ・オー・アイ・オー／過ぎ去りし愛の夢／メロディ・フェア／マイ・ワールド／愛があるなら／救いの鐘／ロンリー・デイ／イン・ザ・モーニング／想い出を胸に／そして太陽は輝く／ラン・トゥ・ミー／恋のシーズン／アライブ

●MW－2073　¥2,000

好評発売中

好評発売中

小さな恋のメロディー
ヘラルド映画「小さな恋のメロディー」
オリジナル・サウンド・トラック
イン・ザ・モーニング／メロディ・フェア／スピックス・アンド・スペックス／F のロマンス・テーマ／ギヴ・ユア・ベスト／ラヴ・サムバディ／1日中踊ろう／若葉のころ／シーサイド・バンジョー／先生を追いかけろ／ティーチ・ユア・チルドレン
●MP－2172　¥2,000

ザ・ビー・ジーズ／ゴールデン・ダブル・アルバム
マサチュー・セッツ／ニューヨーク炭坑の悲劇／ラヴ・サムバディ／誰も見えない／瞳を閉じて／ホリディ／ワールド／ワーズ／アイディア／ジョーク／獄中の手紙／白鳥の歌／若葉のころ／エディソン／ランプの明り／ウィスパー・ウィスパー／恋のサウンド／他全28曲
●MP－9317/8　2枚組　¥3,000

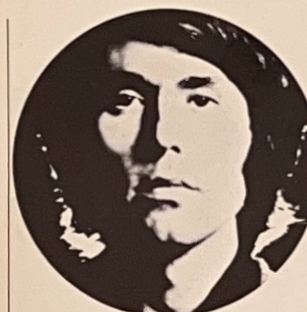
マイ・ワールド／ザ・ビー・ジーズ・ベスト・コレクション
マサチューセッツ／ニューヨーク炭坑の悲劇／ターン・オブ・センチュリー／ラヴ・サムバディ／メロディ・フェア／アイ・オー・アイ・オー／想い出を胸に／若葉のころ／イン・ザ・モーニング／ロンリー・デイ／カントリー・ウーマン／恋のシーズン／マイ・ワールド／他全24曲
●MP－9403/4　2枚組　¥3,000

ライフ・イン・ア・ティン・キャン／ザ・ビー・ジーズ
希望の夜明け／アイ・ドント・ワナ・ビー・ジ・ワン／サウス・ダゴタ・モーニング／リヴィング・イン・シカゴ／ホワイル・アイ・プレイ／マイ・ライフ・ハズ・ビーン・ア・ソング／カム・ホーム・ジョニー・ブライディ／メソッド・トゥ・マイ・マッドネス
●MW－2066　¥2,000

来日記念シングル
ひとりぼっちの夏
片面＝エリーサ
ザ・ビー・ジーズ
●DW－1075　¥500

発売元／ポリドール株式会社

愛の色。

秋のLove Sounds

炎の男…愛、その喜びを歌う。初来日!!

ラファエル
RAPHAEL ONE MAN SHOW

東京公演
9月25日(火)・26日(水)・27日(木)・28日(金)
7:00P.M. 芝・郵便貯金ホール
A＝¥2,500/B＝¥2,000/C＝¥1,500
ラブ・シート(2名様)＝¥4,500

大阪公演
9月30日(日)2:00P.M. フェスティバルホール
S＝¥2,500/A＝¥2,000/B＝¥1,500
BOX＝¥3,000/ラブ・シート(2名様)＝¥4,500

ヒット曲＝ラ・ジョローナ/ラ・バンバ/ワーク・ソング
オルフェの歌/生きる喜び/ライダース・イン・ザ・スカイ

ニーナ・シモン
NINA SIMONE《初来日!!》

東京公演
10月26日(金)・29日(月)7:00P.M. 新宿・厚生年金ホール
31日(水)・11月1日(木)7:00P.M. 芝・郵便貯金ホール
A＝¥2,500/B＝¥2,000/C＝¥1,500
ラブ・シート(2名様)＝¥4,500

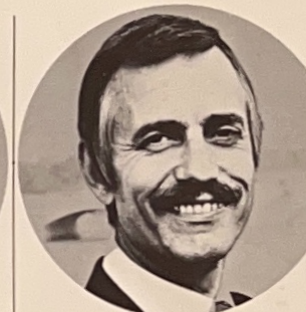
大阪公演
10月24日(水)6:30P.M. フェスティバルホール
S＝¥2,500/A＝¥2,200/B＝¥1,800/C＝¥1,500
BOX＝¥3,000/ラブ・シート(2名様)＝¥4,500

横浜公演
10月27日(土)6:30P.M. 神奈川県立音楽堂
A＝¥2,500/B＝¥2,000/C＝¥1,500

名古屋公演
10月23日(火)6:30P.M.

名古屋公演
10月23日(火)6:30P.M. 愛知文化会館

静岡公演
10月30日(火)6:30P.M. 駿府会館

ヒット曲＝禁断の果実/アイ・ラブ・ユー・ポギー/
ヒア・カムズ・ザ・サン/愛を信じて/時代は変る

ポール・モーリア グランド・オーケストラ
PAUL MAURIAT GRAND ORCHESTRA

東京公演
11月10日(土)・28日(水)7:00P.M. 11日(日)2:00P.M.
新宿・厚生年金ホール
27日(火)7:00P.M. 渋谷公会堂
S＝¥2,800/A＝¥2,500/B＝¥2,000/C＝¥1,500
ラブ・シート(2名様)＝¥4,500

大阪公演
11月29日(木)・30日(金)6:30P.M. フェスティバルホール
特＝¥2,800/S＝¥2,500/A＝¥2,200/B＝¥1,800
C＝¥1,500/BOX＝¥5,000
ラブ・シート(2名様)＝¥5,100

横浜公演
11月15日(木)6:30P.M. 横浜文化体育館

神戸公演
11月16日(金)6:30P.M. 神戸文化ホール

ヒット曲＝恋はみずいろ/エーゲ海の真珠
この胸のときめきを/渚の別れ/蒼いノクターン

トニー・ベネット
TONY BENNETT

東京公演
11月19日(月)・24日(土)7:00P.M. 新宿・厚生年金ホール
S＝¥3,500/A＝¥3,000/B＝¥2,500/C＝¥2,000
D＝¥1,500/ラブ・シート(2名様)＝¥6,500

大阪公演
11月23日(祝)7:00P.M. フェスティバルホール

ヒット曲＝霧のサンフランシスコ
フォー・ワンス・イン・マイ・ライフ/おもいでの夏
フー・キャン・アイ・ターン・トゥ/ある愛の詩

KYODO TOKYO PRESENTATIONS '73
Love Sounds
お問合せ　キョードー東京03-407-8155・3426
キョードー大阪06-344-0412

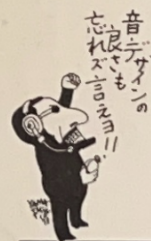
さわやかさん

彼、私のこと考えてくれるかしら・・・
くれてたら、
花とキリンレモン・・・届けよう。
地球は花園。

さわやか・すきとおった
キリンレモン
キリンビール株式会社

缶入りキリンレモン全国いっせいに新発売! お近くのお酒屋さんなどでお求めください。

National

ミキシングプレイがいろいろできる《一枚うわ手の録音機》

お気に入りのアーチストと共演できるMAC自慢のミキシングプレイ!

自慢のテープ再生とゴキゲンなボーカルをミキシング…音の調整も自由自在!

ミキシングプレイで唄うキミの歌声をそのまま生かしてオリジナル録音!

オーディオ感覚いっぱいのMAC-ff自慢の新機構です

- ★超高感度の3バンド〈FM・MW・SW〉を安定受信
- ★オーディオ仕様…25ワットの強力パワー
- ★気ラクで安心…スリープスイッチ採用
- ★テープ終了時に止るオートストップ
- ★音量調整のいらない自動録音方式
- ★充電式電池もOKの4電源方式

❶高感度の内蔵マイクに!
ワイヤレスマシンを収納するだけで、エレクトレット型コンデンサマイクに。

❷ワイヤード・マイクにも!
外部マイク端子に付属のミニコードで接続するだけ。ハンドタイプとしてフルに使える。

❸取り外すとワイヤレスマイク!
本機が2台あれば、トランシーバにも—それぞれの発振周波数をずらせばワイヤレス交信がOK。また同時通話も可能。

❹MAC-ffのサウンドをON-AIR!
ワイヤレスマシン内蔵状態で、スイッチONにするだけ。テープを再生しながら同時にサウンドをFM電波で飛ばせる。

❺テープ・レコード・テレビなどの音もFM電波に!
各サウンド機器のイヤホン(出力)端子に、ワイヤレスマシンを接続するだけでお好みの音声がFM電波に乗る。同時録音もできて便利。

世界に伸びる技術のナショナル

Barry Gibb
Robin Gibb
Morris Gibb